

4th Global Work Camp 報告書

～未来へのつながり～ in Isahaya

開催期間

2016年9月16日（金）～19日（月）

実施会場

国立諫早青少年自然の家（長崎県）

主催団体 一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

目次

目的・概略	1	分科会2 ボランティア	10
スケジュール	2	分科会3 まちづくり	11
基調講演	3	分科会4 環境	12
アイスブレイク	4	分科会5 幼児教育	13
全体交流会	5	実行委員会より	14
ユメノトビラ	6	アンケート	15
阿蘇学	7	熊本地震被災地視察	16
観光	8	4日間の振り返り	18
分科会1 多文化共生	9		

目的・概略

・目的

～グローバル社会における人と人をつなぐ国際交流と若い世代の人材育成～
グローバル化、新興国（特にアジア）の成長等、世界全体の社会構造が大きく変化の中で、アジアを中心に未来を担う若い世代が集い、交流を図りながら、共生社会を構築するための自己の存在認識と可能性を発見する。

・概略

[期 間] 2016年（平成28年）9月16日（金）～19日（月）3泊4日

[会 場] 国立諫早青少年自然の家（長崎県諫早市白木峰町1109-1）

[参加者] 70名

日本人大学生 50名

留学生 10名（4ヶ国：中華人民共和国6名、インド2名、インドネシア1名、イラク1名）

海外の大学生 10名（4カ国：ミャンマー3名、タイ3名、モンゴル2名、インドネシア2名）

○主催

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

（平成28年度文部科学省青少年教育施設を活用した国際交流事業として実施）

スケジュール

9月16日(金) 初日

- 8:00 日本文理大学(大分) 出発
- 9:00 熊本市国際交流会館 出発
- 9:30 博多駅(福岡) 出発
- 12:30 国立諫早青少年自然の家 到着
- 13:00 昼食
- 13:30 開会式・開会宣言
基調講演
- 15:15 全体アイスブレイク
- 17:00 夕べの集い
- 17:30 夕食
- 18:30 全体交流会
 - ・民族衣装 & ダンス紹介
 - ・4コートバレー
- 21:00 入浴
- 22:30 就寝

9月17日(土) 2日目

- 6:30 起床
- 7:15 朝の集い
- 7:45 朝食
- 9:00 分科会活動① 昼食
- 17:00 夕べの集い
- 17:30 夕食
- 18:30 ユメノトピラ
- 21:00 入浴
- 22:30 就寝

9月18日(日) 3日目

- 6:30 起床
- 7:15 朝の集い
- 7:30 朝食
- 9:00 分科会活動② 昼食
- 17:00 夕べの集い
- 17:30 夕食
- 19:00 阿蘇学
- 21:00 入浴
- 22:30 就寝

9月19日(月) 最終日

- 6:30 起床・清掃
- 7:15 朝の集い
- 8:15 朝食
- 9:00 全体報告会
- 10:20 評価会・閉会式
閉会宣言
- 12:00 昼食
- 13:00 国立諫早青少年の家 出発
武家屋敷観光(島原)
- 15:45 観光地出発
- 18:00 熊本市国際交流会館 到着・解散
- 19:00 博多駅 到着・解散
- 20:00 日本文理大学 到着・解散

基調講演

千葉大学2年 田代 智也

グローバルワークキャンプの始まりは基調講演からです。これから4日間を過ごしていくにあたり、どんなことが大切で、どんなことを考えていけばよいのか、参加者自身でまず考えてみる機会となっています。

今回は熊本市国際交流振興事業団事務局長の八木浩光氏にご講演いただきました。

テーマは「熊本地震」。

多くの参加者、そしてこのグロキャンの開催にも大きく影響したこの地震。

今回は、熊本市国際交流会館での対応を中心として、外国の方の避難所で過ごすうえでの文化の違いや支援の様々な形など、多文化共生に関わる部分についてお話しいただきました。

熊本市国際交流会館は熊本地震直後から避難所に指定され、特に多言語での情報発信、外国人の生活サポートを中心に対応されました。

地震が起こった時に情報弱者の方が大きく影響を受けるということはよく言われる話であると思いますが、それは外国の方に顕著に表れます。特に災害情報には、日常会話では使わない難しい単語もたくさん使われるため、非常に厳しい状況に立たされました。

それに対するフォローは緊急時だからこそ必要であり、多文化共生社会の更なる実現のためにもなくてはならない要素であるとお話を通じて感じました。

そして、なかなか表には現れませんが、ボランティアの力によって、様々な角度から支援が行われていたというお話もありました。その1つ1つが誰かの生活や心を支えていて、大切であったのだなど当事者の考えに立つと強く感じました。

また、グロキャン設立にも関わっていらっしゃる八木さんからは、このグロキャンの意義についてもお話しくださいました。参加者の皆さんの中には、漠然とした不安を抱えていた方もいらっしゃったかと思いますが、八木さんのお話によって、どのようにこの4日間を過ごせばよいかということが見えた方もいたのではないのでしょうか？

「グローバル化」という言葉が浸透している現在の日本ですが、国際的に活動していくこととは同時に自らの生きていたふるさと、背景を理解し、誇りに思うことに繋がっていきます。

八木さんが最後に私たちに投げかけられた「Good Luck!」というメッセージは、真のグローバル化を実現する第一歩としてこのグロキャンを活用してください！という意味だったのではないのでしょうか？

グロキャンが終了した今、皆さんがグロキャンにおいて生活を変わった、変えたいと思ってくれたら、とてもうれしく思います。

全体アイスブレイク

筑紫女学園大学 2年 大賀万柚子

私たちは「体がほぐれれば、緊張もほぐれる」と考え体を軽く動かすアイスブレイクを中心に行いました。そして、外国人の方も日本人の方も気軽に楽しめるようにルールを少し変更して、簡単な英語を使うようにしました。お互いに少し知り合った状態で分科会活動が行えるよう、そして、部屋で過ごす時間が楽しくなれば良いと思い、各プログラムで、分科会ごとや部屋ごとに分かれるようにしました。また、EC※と参加者の距離が少しでも縮まるようにECにもすべてのアイスブレイクに参加しました。

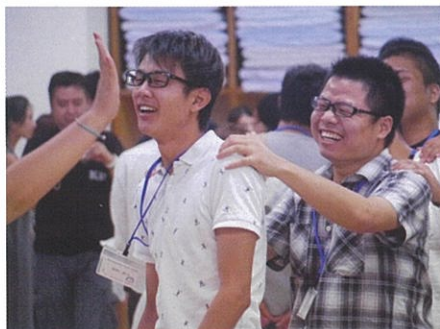
まず、より多くの人と話すきっかけづくりに「エグザイルじゃんけん」を行いました。じゃんけんも国によって違うので足を使ってじゃんけんする形をとりました。そして、じゃんけんをする前に必ず英語で簡単な自己紹介をするようにしました。最初のアイスブレイクで、すぐに緊張もほぐれたようで参加者たちは皆笑顔で楽しんでいました。

次に分科会ごとに分かれて列を作り、大きなボールを頭上や足の間から後ろにパスするというゲームを行いました。レースは二回行いました。一位だったチームではハイタッチするなど、ともに喜んでいく姿がみられ、喜びや達成感を共有することができたと思います。

そして、最後に部屋ごとに分かれてジェスチャーゲームをしました。制限時間の中で、相手にいかに正確に伝えようとするか、一方では相手が伝えようとしていることを理解しようとするかが大事になってきます。少し恥ずかしがっている参加者もいましたがしっかりと相手と向き合って笑顔で伝えることができていました。

やはり、体を動かすことで緊張もほぐれ、皆さんが終始笑顔でアイスブレイクを楽しんでくれたと思います。見ている私もとても楽しかったですし、参加していたECも全力で楽しんでいました。ときにはECが盛り上げ役となり周りを巻き込んで楽しんでいる場面も見受けられました。参加者どうしの距離、ECとの距離ともに縮まり友達の輪が広がるきっかけづくりになったと思います。

※ EC = Excecutive Comittee (実行委員)



全体交流会

九州ルーテル学院大学 1年 宮本 芽衣

全体交流会では、参加者同士が仲を深めるため、みんなで楽しめるよう企画をしました。まず、最初に「サンバおてもやん」という熊本市を代表する「火の国まつり」のダンスを参加者全員で踊りました。もちろん市外や、国外からの踊りを知らない参加者も多くいましたが、浴衣を着た EC や、熊本出身で踊りを知っているという参加者が積極的にダンスを教え合い、最終的には全体で大きな円を描き、日本人の参加者も、外国人の参加者も楽しそうに「サンバおてもやん」を踊っていました。

次に招へい参加のインドネシア、タイ、モンゴルの方たちにそれぞれ自国の民族衣装、民族ダンスの披露をしてもらいました。まず、インドネシアのラティーさんとアユさんのお二人が「クバヤ」というバリ島の民族衣装を美しく着こなしてパフォーマンスを始められました。ラティーさんは、” Oleg Tambulilingan (オレグタムリリンガン)” という民謡を使ったダンスを、アユさんには “Cendrawasih(チェンドラワシ)” というインドネシアの鳥を表したダンスを披露していただきました。お二人は、表情もしっかり場面場面で変えられていて、ダンスはしなやかで女性らしさが表現されており、とても魅力的なパフォーマンスでした。

タイのジェーンさんはシックで落ち着いた雰囲気のある民族衣装を身につけタイの民族ダンスを披露してくれました。ジェーンさんの着ていた民族衣装の上着はスカーといい、巻きスカートをパーシンというそうです。タイの民族ダンスはとても可愛らしく、ジェーンさんは時折笑顔を見せながら踊っていました。

さらに、モンゴルのテスホヤグさんと、オイドブさんのお二人は、デールという民族衣装を披露してくれました。女性用デールは、襟のあるワンピースで、ウエストを強調して着付けるようです。

後半は、4面バレーボール大会を行いました。4面バレーとは、4チーム同時に行うバレーで、ボールを落としたチームが減点されていくというルール。バラバラに振り分けられたチームに最初は戸惑いつつも、段々参加者も EC も一生懸命ボールを追いかけて、本気のプレーモードに入っていました。ゲームをやっていくうちに参加者同士の距離はグッと縮まってきているようでした。



モンゴル



タイ



4面バレーの様子



インドネシア

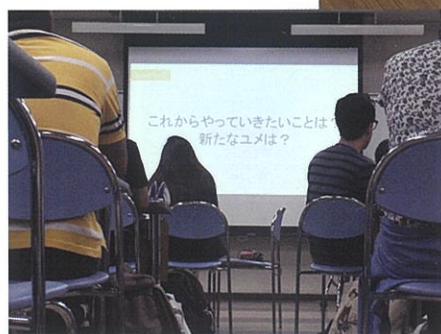
ユメノトビラ

日本文理大学 2年 宮野 行雲

ユメノトビラでは、参加者の今と、参加者が思い描いている夢を繋ぐ架け橋にしたいというテーマを掲げ、参加者が夢を考える場、自分の夢を発信し・見つめ直す場、人の夢を聞く場の3つを設定しました。1部では、佐賀大学の山口諒真さん、熊本市職員の井手口香純さん、一般財団法人ドリーム・ラボの津田美矩さんの若い3人をパネラーに迎え、パネルディスカッションを行いました。「今、どんな活動をしているのか?」、「今の活動を始めたきっかけ（人生のターニングポイント）」、「ユメが変わったこと」、「周囲の人に夢を反対された時どうしたのか?」、「これからやっていきたいことは?（新たな夢）」など5つの質問を通して、パネラーの方の話を聞いて感動しました。参加者が行動するためのきっかけ作りしてほしいという思いや、今とても輝いているパネラーの方も、今の私たちと同じような悩みを持っていたことを知って、自分の可能性を広げていってほしいと思っています。特に山口さんの自分の本気を周りに伝えるためにマラソンに応募してみるというのは、何かをしたいと思ったら、始めの第一歩が大事と感ずることができました。

2部では、「ゴールデンサークル」というワークシートを使って、自分の夢を発信する時間を設けました。実行委員も参加して、3人という小さなグループを作り、グローバルワークキャンプに参加した全員が夢について濃密に話せる環境を作りました。ここでは、夢を発信していく過程で自分の頭の中で整理され、人の夢を聞くことで、新たな発見をしてもらえるようにしました。始めは静かだった参加者も、自分の夢を話すことで、会場全体が白熱していきました。普段から、自分の夢を考える場・発信する場があまりないのでと感ずました。人に夢を話し、意見を交換することで、参加者の目が輝き、自信が出てくる姿を見て私も話したいと強く思いました。そして、ここにはもう一つの目的がありました。それは、グローバルワークキャンプに参加した全員の新たなつながりを作ることです。個々の夢が、1つの大きな夢へとつながる所もあると思います。今回、夢について語り合った仲間と、お互いの夢を叶えるために日本を超えて世界中で協力してほしいという願いもあります。ひとりでは実現できない夢も、周りの人を巻き込んで実現してほしいです。

人に自分の夢を話すと、楽しくなったと思います。そして、人の夢を聞くとその人を知りたいと思うようになったと思います。ゴールデンサークルは、下の図のように「なぜ」から「どのように」、そして「何をするか」まで夢の実現に向けた行動がずっと広がっていきます。私たちもこれからの人生、同じように人とのつながりを広げていきましょう！



阿蘇学

日本文理大学 2年 上田 亮

この阿蘇学の講師として、「熊本・観光文化検定テキストブック」や「まるごと天草本」などの本を出版された株式会社マインド代表取締役の大村祐二氏に、阿蘇の自然と歴史・成り立ちについてビデオやスライドを用いてお話していただきました。今の阿蘇の地域の大自然がどう開拓されていったのか、阿蘇に伝わる神話・言い伝えとして有名な「健甞龍命（たけいわたつのみこと）」を軸に、現在の阿蘇を見つめていきました。

二重峠と立野の成り立ちでは、「健甞龍命が草部（くさかべ）から阿蘇へ向かう途中に、満々たる湖水がカルデラの中にあり、その広大さに感心して、水を流して田畑にしようと思い、湖水を流れ出るように外輪山の一部を力まかせに蹴ったが破れなかった。なぜならそこは山が二重になっていて1番厚いところだった。このことからここは『二重峠』と呼ばれるようになった。また、蹴った際に尻餅をついた健甞龍命が、「もう立てぬ」と言ったことから『立野（たての）』と呼ばれるようになった」というものがありました。

また、米塚の成り立ちでは、「元々は健甞龍命の指導で収穫されたお米が積み上げられていたところであった。現在、米塚の頂上が少し凹んでいるのは、健甞龍命が、困っている人たちのためにお米をひとすくい恵んだためだと言われている」というものもありました。この言い伝えは現在の社会福祉や支援につながっているのではないかというお話があり、非常に感銘を受けました。

さらに、阿蘇の有名なあか牛や野焼きの話もしていただきました。野焼きは、草原を維持していくのに大切な行事であり、かなりの重労働を要するものです。現在では高齢化や人手不足が進み、維持することが難しくなってきたため、ボランティアに頼っている部分が多いそうです。あか牛は、阿蘇にしかない和牛であり、野焼きなどで維持されてきた阿蘇の大自然で豊かに育ったものであるそうです。二つのお話の中で、自然を維持していくことの大切さを強く感じることができました。

今回行ったこの「阿蘇学」はこれまでで初めてのプログラムでした。このプログラムの目的として、「阿蘇という地域を知ること、自分の住む地域に目を向けられるようになる」というものがありました。今回開催された場所が諫早ではありましたが、自分の暮らす地域ではないところの話聞く、また、どの地域にでもある歴史を紐解きながら現在の地域を見つめていくことで、自らの地域に改めて興味を持ち、これからの地域活性化に繋げていくことが大切だと感じるようになりました。

各々の地域の昔からの知識や知恵を受け継ぎながら、各々の地域の「“地元”学」を見つけ出し、より豊かな社会を作っていきましょう。



観光 島原武家屋敷

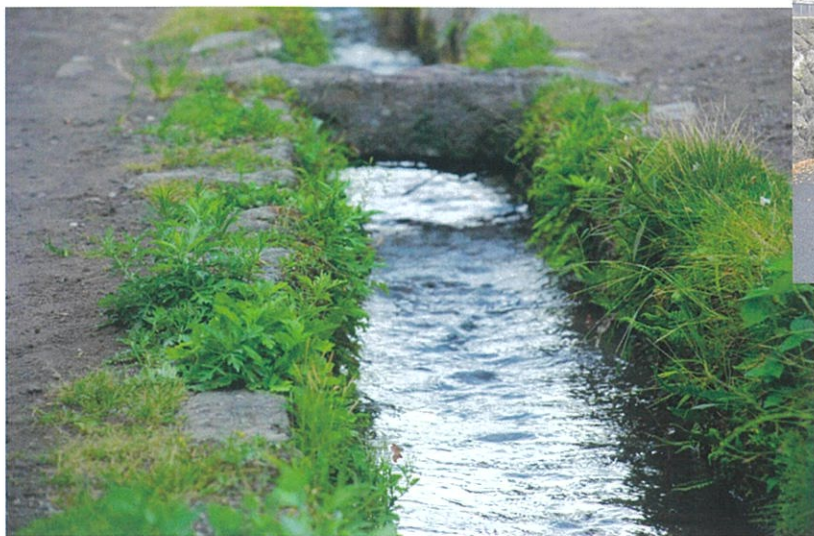
熊本大学 2年 藤本 喬大

最終日の午後は武家屋敷観光にみんなで行きました。島原武家屋敷は、島原城とともに400年ほど前に作られ、当時は従士が住んでいた町です。今回観光した武家屋敷は約400メートル、幅6メートルで、実際の民家も3つ解放されており中に入って見学することもできました。

バスから降り、狭い小道を進んでいくと、石畳の道が顔を出しました。世間から切り離されたような情緒があり、日本風の造りのはずなのに外国に来たような気持ちになります。武家屋敷街に入ってまず目につくのはやはり真ん中を流れる清水です。この清水は、当時は飲料水として用いられており、北西の「熊野神社」を水源としています。植物や岩で作られた溝で涼しさも感じられました。武家屋敷街をゆっくり進んでいくと「山本邸」「篠塚邸」「鳥田邸」の3つの民家に入ることができました。山本邸は庭や縁側があり、従士がくつろいでいたことを思いながら参加者の方も縁側に座って庭の景色を眺めていました。篠塚邸、鳥田邸はそれぞれ台所、五右衛門風呂が特徴的で、とても興味深かったです。3つの屋敷ともそれぞれに特色があり、私たちが住むならばどこがいいかなどを考えながら見学していました。民家は、屋根や室内の造りや庭など、多くが現代の住宅と違っており、外国からきた参加者の方だけでなく、日本人参加者も楽しむことができました。

武家屋敷街はきれいに並べられた石畳が美しかったです。道は一本の直線ですが、真ん中を流れる清水のおかげでのんびりとした気分で歩くことができ、先に見える島原城への期待が膨らみます。400年前も同じように、武家屋敷街をあるきながら島原城への想いを募らせたのだと思います。

今回の観光で、日本独自の文化を学ぶことができました。縁側や五右衛門風呂などは外国の方にとって初めてだったため大変驚かされていました。日本人参加者にとっても、屋根や部屋の造りなど、現在と全く違う造りで見学していて楽しかったです。今までは教科書などでしか見たことがなかった江戸時代の民家を自分の目で視ることができて本当に良かったです。グローバルワークキャンプ最終日ということもあり、参加者や実行委員間の仲もよくなっており、みんなで和気あいあいと武家屋敷を探索できました。たくさんの仲良くなった参加者と観光ができ、とても楽しい思い出になりました。



第1分科会 多文化共生

熊本学園大学1年 丸尾日菜乃

この分科会は、まず、最初に日本に住んでいる外国人が生活していく中でどういうことに困っているのか知り、問題意識を持って普段から外国人と共に生活していく上で「大学生である私たちに何ができるのか」を考え、キャンプ後に実行してもらうことを目的に始めました。

1日目の午前中は多文化共生とは何かについて、3チームに分かれてキーワードから連想する言葉を書き出し、線をつないでいくウェビング法をもちいて考えてもらい、その後のバーンガで実際に異文化を体験してもらいました。バーンガはトランプを使った異文化コミュニケーション体感ゲームで、普段は常識だと思っていたことや、異なるルールの下でどのような気持ちになったり、どのように対応できるのかを体感できるゲームです。また、多文化共生における問題として、給食でアレルギー専用の給食は作るのにハラルに対応した給食はほとんどないという現実があります。もっと周りがイスラム教が豚肉やアルコールに由来する食事を禁じているという戒律について知っておくべきだという意見が出されました。午後は、熊本の下通り・上通りを歩いたムービーを見て、どれだけ外国人のための看板や翻訳がされているかを見てもらいました。所々に翻訳されていましたが、まだまだ足りないという意見がでました。熊本地震における外国人の問題を挙げてみても、やはり言語・文化の違いなどが主にあり、熊本地震を体験した外国人のアンケートでも、日本人独特の「空気を読む」という行動がとてもストレスだったという回答がありました。

2日目の午前中は事例紹介として普段から多文化共生の活動をされている学生の田中琢間さん、大和賢佑さんに話をしてもらいました。田中琢間さんは「COLORS」という団体で、浜松市を中心に外国にルーツを持つ若者の進学や就職をサポートする活動を自分たちで企画・運営をしています。大和賢佑さんは「@ほーむ」という団体で熊本で活動されており、外国から来た子どもに対して言語指導や交流を行っております。参加者からも、活動をしたいという声がありました。

午後はこれまで学んだことをいかして、理想・私たちに出来ることを話しあいました。そこで、「情報を共有するコミュニティ作り」が必要という意見が出たので早速分科会でLINEのグループを作りました。

まだまだ日本は多文化共生社会とは言えないので、「COLORS」のように自分たち（学生）で企画・運営をするような団体が全国的に増えるといいなと思いました。



第2分科会 ボランティア

鹿児島大学 3年 鈴木 詩織

ボランティアの分科会では「未来への繋がり」をテーマにボランティアについて学び、最終的にはボランティアを参加者自ら企画し、発表しました。

分科会1日目は、アイスブレイキングで打ちとけた後、実際にボランティア活動をしてもらいました。活動内容は参加者に事前に何も言わず、いきなり清掃の手伝いを求めていることを伝え、反応を見ましたがみんなは自ら手伝おうという気持ちを示してくれてとても積極的に働いてくれました。この様にボランティアは誰にでも出来て、身近に溢れており自発的に行動することが大事であることを感じてもらいました。

その後、様々な視点からボランティアに対する意見を共有した後、実行委員の山下さんからボランティアに対する失敗例やボランティアの魅力などを話してもらいました。「ボランティアと恋愛は似ている」という言葉に参加者はみんな興味深く聞いていました。

その後の講演では国際ボランティアとして、JICAの隊員で2年ザンビアに駐在された、茂田敬介氏の話の話を聞きました。

地雷処理の話やネリカ米という畑でできるお米の話などをして頂き、最終的にはボランティアとは「世界に恋するお仕事」である、という言葉の頂きました。講演後、参加者自ら質問をしに行く姿が見受けられました。

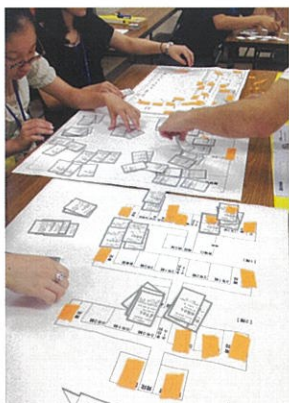
1日目の最後は、実際にボランティアを行っている NGO などの団体の活動を元に、提示された問題を自分たちの身の丈でどのように解決できるのかを考えてもらうシミュレーションをしてもらいました。難しいワークでしたが、最終的には一人ひとりがちゃんと自分なりのボランティア活動を考えてくれました。

2日目午前中は、シミュレーションその2として、「HUG」という避難所運営ゲームをしてもらいました。参加者に避難所の運営側になってもらい、次々に現れる問題を抱えた避難者をどこに配置すべきかを考えたり、トラブルの解決方法を話し合ったりしてもらいました。2グループに分かれてやってもらいましたがこれには正解がないので、グループの中で話し合いながら進めたり終わった後にお互いグループと見比べたりしました。

その後は、実際にボランティアを企画する時間に入りました。「未来へ残したいもの」、「熊本・大分震災」をテーマにして2つに分かれてもらい、ボランティアを企画してまずは分科会のなかで発表した後、企画推進委員の大人の方々にアドバイスを頂いてより良い企画に作り上げました。

最初はどちらのグループもなかなか考えがまとまらなかったり、文書化出来なかったりと難航しましたが、最終的にはどちらもターゲットを絞れた、実現性のあるものになりました。熊本・大分震災のボランティアは「SHARE SMILE ツアー」を企画し、復興の中で遅れている文学、文化財を後世に残すため、ツアーを行ってその資金で復興支援をするというものでした。

未来につながるボランティアでは「SHARE SMILE キャンプ」を企画しました。日本で不登校になった子供がタイに行き、またタイで金銭的に学校に行けない子供が日本に行き交流を深めるというものでした。



第3分科会 まちづくり

聖心女子大学 1年 小田 彩美

この分科会では、自分のまちをより良いものにするため、課題を発見し、自らアクションを起こすきっかけ作りをすることを目的とし活動をしました。

分科会1日目は参加者の緊張をほぐすため、アイスブレイクから始めました。ミャンマーからの参加者がいたので、ミャンマー語の数字を用いたアイスブレイクなどをして和気あいあいと話し合いができる雰囲気づくりをしました。分科会内容としては、初めに大学生や民間が実際に行っているまちづくりの活動例を紹介し、地域の課題発見から解決までの過程に触れました。そして2019年ラグビーワールドカップ開催に向けて熊本をアピールするプロジェクトを考えよう！という課題を出し、分科会の中で3つのグループに分かれ、アイデアを書いたカードをグループ毎にまとめて、それらのテーマについて話し合いました。そして分科会内で発表会をし、1、外国人観光客への通信対策（現在、開催予定スタジアムにWi-Fiがないので設置する。ポケットWi-Fiを貸し出す。）、2、アフターケア（ワールドカップ目的で来た人たちに再び来てもらうために、言語などの障壁を取り除き、熊本の文化を効果的に体感してもらう。）、3、文化の違いによる衝突を防ぐ取り組み（飛行機や電車などの交通機関やSNSなどで、日本を知ってもらえるような親しみやすいPVを流す。）などの具体的なアイデアが出されました。

2日目は自分のまちでできることと題しS W O T分析を行いました。一人一人が自分のまちの、Strength(強み、内的要因)、Weakness(弱み、内的要因)、Opportunity(機会、外的要因)、Threat(脅威、外的要因)をワークシートに書き出しグループで共有しました。そして各グループでひとつの課題に絞り、その解決方法をKJ法を使用して話し合いました。またグループごとに、Issue、Resolve、How、Whoの項目に分けてまとめました。さらに、解決方法をまとめるにあたって‘私たち学生ができること’そして‘継続的にできること’という条件を設けました。この条件を満たすことで、より身近な解決方法を導くことができ、アクションを起こしやすくなると思ったからです。ひとつのグループを例に出すと、Issue「治安が悪い」Resolve「割れ窓理論（軽微な犯行を減少させることで他の犯行の誘発を防ぐ）を用いる」How「落ちているごみを拾い、落書きを消す」Who「その地域に住む人たち」と、まとめました。治安が悪いという課題の解決方法をダイレクトに考えるのは難しいですが、このように様々な方法を使用することで、明確かつ簡潔にまとめることができました。

この2日間の活発な話し合いの中で沢山のアイデアが飛び交い、EC、参加者ともに成長できたキャンプになりました。ここで得られたことを次のアクションへの原動力にしてもらえたらと思います。



第4分科会 環境

日本文理大学 2年 大工園 廉

この分科会の最終的な目標として設定したのは、自分の地域だけでなく、世界の環境問題に対して自分の意見・考えを持つこと、それについて議論することの大切さを知ることです。

私達が2日間で行ったことは、長崎で15年前から議論されている、諫早湾の干潟問題について議論したことです。(諫早湾の干潟問題とは、干拓と災害防止を目的として建設された堤防によって海水をせき止め、干拓を行い広範囲の農地を作りましたが、堤防によって潮の流れが変化し、漁獲量は減少、特産物であった二枚貝や海苔は不作となり、赤潮の発生などの問題が起きたため、漁業組合から開門を求める声が挙がっています。それに反対するのは、堤防の内側で農業を営む農業従事者。この問題は漁業と農業の対立の事です。)

はじめに、メンバーの仲を深めるためにアイスブレイク(パースデーサークル、環境クイズ)を行いました。どれも好評で、お互いの仲を深めるきっかけになりました。次に、今回議題とする干潟について軽い説明を行いました。参加者は様々な国、地域から参加しており、それぞれに環境問題を抱えています。そこで、それぞれが抱えている環境問題を、発表することで、世界の環境の現状(モンゴルの人口の一点集中によるスモッグやアメリカ・ネヴァダの砂漠問題など)を知りました。

午後はフィールドワークに出ました。行先は干拓の里にある干拓の歴史の資料館と、海と農地を隔てる潮受堤防を見学しました。ここでは干潟問題に関係する干拓の歴史を学び、潮受堤防の役割やそれがもたらすメリット、デメリットを知りました。

特に盛り上がりを見せたのは2日目です。ここでは前日に資料館・堤防を見学したことを踏まえ、農業派・開門派に分かれ熱い議論をしました。どちらのグループも盛り上がりしており、予定の時間を超過するほどでした。出された結論はどちらも、調査のために一定の期間開門する、というものでしたが、そこに至るまでの意見は違っており、とても内容の濃い議論になりました。

恐らく、この議論に正解はありません。しかし、だからと言って放っておくわけにもいきません。少しでも解決に向かうためには、私達一人ひとりがしっかりと考え、自分の意見を持ち、それを相手に伝えることが大事だと思います。そういう意味では、当初の目標であった『自分の地域だけでなく、世界の環境問題に対して自分の意見・考えを持ち、それについて議論することの大切さ』は、十分に達成されたと思います。私達 EC や参加者の皆がこれを持ち帰り、これから先の未来で活かしていけることを願っています。



第5分科会 幼児教育

西南学院大学 1年 山田 京平

「大学生から見た子どもって？あなたにはどう見える？」これがわたしたち幼児教育の分科会のテーマでした。

一言に子どもといっても、一人一人が子どもについて持っているイメージは全く異なります。ポジティブなイメージだったり逆にネガティブなイメージだったり。そこで一日目は参加者の皆さんとともに「子ども」というキーワードからイメージする言葉を書き出し、それらを線をつなぎ、子どもとは何なのかについてイメージを共有することから始めました。実際に行ってみると、「子どもって感情が本当に豊かだよね！」という声や、「子どもってうるさいけどそこがかわいいよね！」といったさまざまな意見が飛び交いました。全員でイメージを共有した後はこどもの心と体について学びました。さらに、日本だけでなく世界の子どもたちにスポットを当て世界の保育制度について学び、これからの子どもたちが生きていくためには社会がどのような取り組みをしたいかなければならないのか、ということについて学びました。また、子どもたちは遊びを通して学ぶことが多いことから音楽を通して自分を表現する「リトミック」と呼ばれるものや、牛乳パックを使って工作をしてみることで実際の子どもたちが体験するものに近い活動をわたしたちは分科会に多く取り入れました。

二日目は実際に子どもたちと触れ合うために、長崎県諫早にある「こどもの城」という施設に行きました。座学を通して学ぶ「子ども」と、実際に触れ合って学ぶ「子ども」は全く違いました。まさに「百聞は一見に如かず」。子どもたちの持ち前のパワフルさに終始翻弄されながらも普段では決して得ることのできない体験をさせていただきました。また、午後からは筑紫女学園大学の原陽一郎先生をお招きして昨今の世界の子どもたちの身の回りに起こるさまざまな問題やそれについてわたしたちがどのような立場で、どのような取り組みを行っていけばよいかについて講義をしていただきました。

この二日間で参加者はもちろんのことわたしたち実行委員も新たな発見や今まで持つことのなかった価値観や考え方を分科会の活動の中や施設での子どもたちとの触れ合い、そして先生の講義を通して数多く得ることができました。今回の活動のために協力してくださったすべての皆さん、そして参加者の皆さんに感謝するとともに、これが一過性のものにならないようにしていこうと思います。



実行委員会より

筑紫女学園大学 2年 岩男 咲子

こんにちは、実行委員長の岩男咲子です。第4回グローバルワークキャンプは、みなさんの温かな支えにより、開催、そして無事終えることが出来ました。ありがとうございました。

今回の第4回グローバルワークキャンプでは「多文化共生」、「ボランティア」、「まちづくり」、「環境」、「幼児教育」の5つの分科会に分かれ、話し合いを通して互いの意見を共有したり、テーマに対する問題点や、学びを探しに体験学習に行ったりし、今後私たちが出来ることを考えました。他にも基調講演、全体交流会、ユメノトビラ、阿蘇学といった4つのプログラムを設け、グローバルワークキャンプでしか出来ない体験や交流、そして話を伺いました。

今回のテーマは、「未来への繋がり」でした。参加者をはじめとする、グローバルワークキャンプに関わる全員が、キャンプが終わっても一生繋がっていける仲間になって欲しい、ここに来て新たに生まれた感情を、大事にそれぞれの未来へと連れて行って欲しい、という願いが込められていました。初めは緊張気味だった全員の表情も次第に穏やかに、豊かになっていき、参加者同士がどんな言語、文化、生き方を持つ人とでも、関わり、新たな幅を広げる姿が印象的でした。最終日には、今回の分科会で学んだことを、自身の人生に生かそうと考えているんだ！と熱く語ってくれたり、同室だった班のみんなで、様々な国を訪問しよう！という約束をしていたりと、新たな繋がりを見つけることが出来ました。閉会式や別れの際に、たくさんの涙を流していたみなさんが、次会う日は遠くないと思います。1人1人違う形の新たな繋がりを見つけてくれたこと、また会いたいと思える仲間に出会ったことを、心から嬉しく思っています。この繋がり、ここで終わりではありません。今回の経験をそれぞれの場所で、どのように広めていくのか、どう生かすのかはあなた次第です。1歩を一緒に踏み出す70人の仲間がいます。自分の可能性を信じて踏み出して下さい。

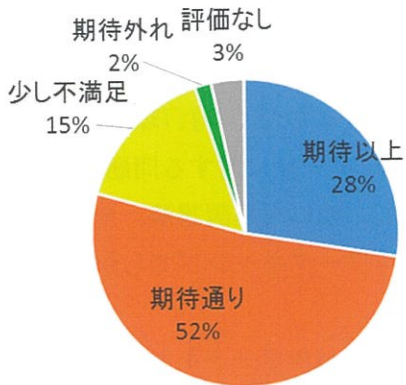
このグローバルワークキャンプは、「グローバル人材の育成」を目的としています。私個人の意見を述べますと、自身の意見を相手に分かりやすく話すこと、互いの違いを尊重し合うことから始まると思っています。グローバルな視点とは何なのか、みなさんも何度も考えて欲しいです。互いが互いを理解しよう、認めよう意識していた私たちは、少なからず「グローバル人材」に近付いていたと思います。私たちなら、もっともっとグローバル人材になれると信じています。

これから第5回、第6回とグローバルワークキャンプは続いていきます。また新たなメンバーと共に新たな内容が始まります。そして世界の変化に合わせて発展していくことでしょう。今後も毎年改良と成長を遂げていくことと思います。私は第3回、第4回とグローバルワークキャンプに関ってきました。みなさんの出会いと繋がりのお手伝いできたことを誇りに思っています。

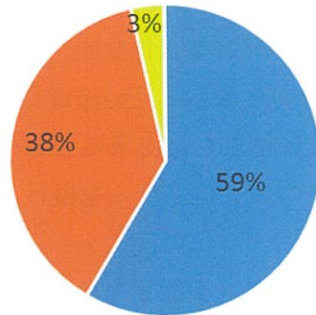
最後に、グローバルワークキャンプ開催前の4月には熊本地震があり、今回は、開催できないことも予想していました。そのような中、こうして参加者総勢70人が集まってワークキャンプが出来たことを、奇跡のように感じています。関わって下さいました協力者・協力団体のみなさま、参加者のみなさん、そして私たち実行委員にかけがえのない貴重な体験を与えて下さった熊本市国際交流振興事業団のみなさまに、心からの感謝を送ります。これからも、このグローバルワークキャンプが、グローバル人材の育成に貢献していくことを願っています。

アンケート集計

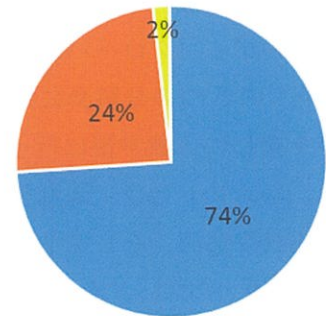
基調講演



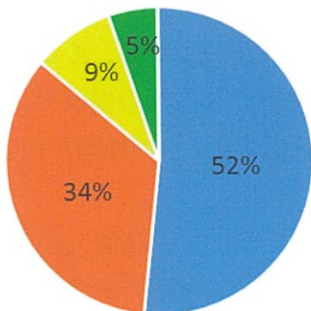
全体アイスブレイク



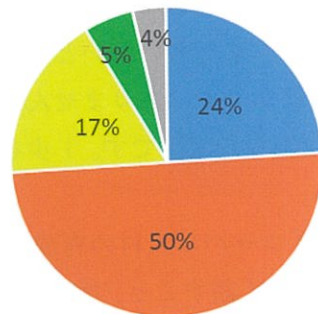
スポーツ交流



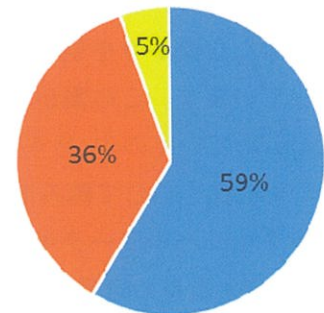
ユメノトビラ



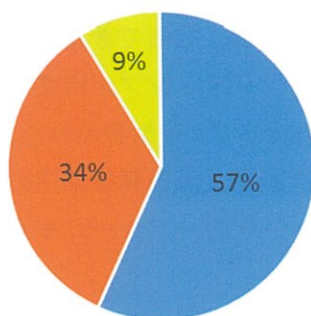
阿蘇学



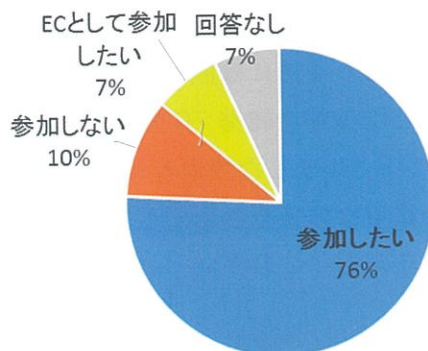
分科会活動



全体報告会



来年も参加したいか



思い出に残ったプログラム

第一位 分科会活動 33%

第二位 ユメノトビラ 29%

第三位 スポーツ交流 21%

満足度

平均点 68.7点 (68.679...)

熊本地震被災地視察

熊本県立大学2年 戸田 千晴

今回のグローバルワークキャンプの日程を終えた翌日、招聘により熊本を訪れてくれた外国人や留学生の方々と数名の日本人を対象に熊本地震の被災地をまわるツアーが行われました。熊本地震から約5か月が過ぎようとしているなか、現在の被災地がどのような状態なのか、被害状況はどの程度なのか、復旧・復興はどれほど進んでいるのかということは日本人だけでなく外国の方々にとっても非常に気になることのようにでした。

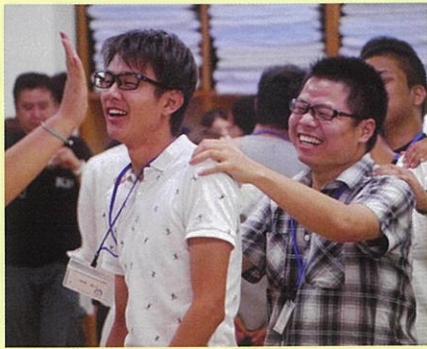
朝からはグローバルワークキャンプ3日目の阿蘇学で講演をいただいた大村祐二氏に甚大な地震被害を受けた熊本城の案内をしていただきました。熊本城の敷地はほとんどが立ち入り禁止となっているため、外から被害を確認することしかできませんでしたが、それだけでも熊本の象徴とも言える熊本城の被害の大きさを目の当たりにして、驚きとともに誰もが口を閉ざす場面もありました。しかし、大村氏から熊本城の構造や歴史、当時の人々の思いを教えていただくにつれて熊本城をこれからの未来に残し、歴史を次の世代へと継承していくことも私たち若者の役目ではないのかと感ずることもできました。また、傷ついた姿でありながらも雄大にそびえる熊本城からは、熊本はこんなことで下を向くような県じゃない！熊本の底力を発揮していこう！と勇気づけられるようでした。

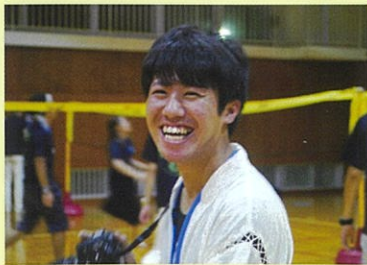
そして午後からは最大震度7が襲った震源地でもある益城町へバスで向かいました。バスに乗っていると突然路面が荒れてバスが揺れ始め、同時に窓の外を眺めると、明らかに先ほどまでいた熊本市内とは被害の大きさが違う地域へと入っていました。参加者の多くは想像以上の被害の大きさと5か月经ったにもかかわらず地震直後の傷跡をそのまま残したかのような状況に驚愕していました。益城町は被害がかなり大きかったため、現在も手つかずの場所が残っているのも現状です。しかし、地震発生直後から比べると復興も着実に進んでいます。そのことをよく示す、県内最大の仮設住宅団地である益城町テクノ仮設団地（約500戸）を訪れました。多くの住民が住むこの仮設住宅団地には仮設のスーパーマーケットや散髪屋、住民たちが集まる公民館のようなコミュニティ施設なども建てられていました。しかし、いくら施設・設備が整ったからと言っても、やはり住みやすい環境とは言えないでしょう。そして次に、益城復興市場・屋台村へ行きました。大型テントの中に飲食店をはじめとした15店舗、21業者が入居し、益城町を盛り上げています。私たちもここで軽食をとり、お店の方の明るい笑顔とテント側面にあるメッセージボードを見て元気づけられました。帰り際にはみんなでメッセージボードに復興を願いメッセージを残しました。

今回の震災視察ツアーは地震の被害をあまり知らない外国の方々に、知っているつもりであった私たち日本人にとって地震を見つめなおす良い機会になったと思います。また今回は被害を受けた場所へ行くたびに、そこには必ず前向きな笑顔が溢れており、明るい熊本の未来を予感させられるツアーとなりました。



4日間の軌跡





第4回グローバルワークキャンプ in 諫早

実行委員メンバー

- ・岩男 咲子 筑紫女学園大学
- ・大和 賢佑 熊本大学
- ・山下 香織 熊本学園大学
- ・鈴木 詩織 鹿児島大学
- ・宮本 芽衣 九州ルーテル学院大学
- ・藤本 喬大 熊本大学
- ・桑本 始奈 熊本学園大学
- ・丸尾 日菜乃 熊本学園大学
- ・戸田 千晴 熊本県立大学
- ・山野 貴絵 熊本県立大学
- ・小田 彩美 聖心女子大学
- ・山田 京平 西南学院大学
- ・大賀 万柚子 筑紫女学園大学
- ・田代 智也 千葉大学
- ・高光 智士 千葉大学
- ・上田 亮 日本文理大学
- ・大工園 廉 日本文理大学
- ・宮野 行雲 日本文理大学

【助成団体】

- ・熊本ユネスコ協会

【協力団体】

- ・日本文理大学
- ・立命館アジア太平洋大学
- ・熊本留学生交流推進会議
- ・JICA 九州

【協力者】

- ・橋村 隆介 (熊本ユネスコ協会)
- ・阿南 栄子 (熊本県国際協力推進員)
- ・木下 俊和 (熊本県立大学講師)
- ・高見 大介 (日本文理大学)
- ・田中 琢門 (静岡文化芸術大学)
- ・山口 諒真 (佐賀大学)
- ・八木 浩光 (熊本市国際交流振興事業団)
- ・井手口香純 (熊本市役所)
- ・津田 美矩 (一般財団法人ドリーム・ラボ)
- ・原 陽一郎 (筑紫女学園大学)
- ・茂田 敬介 (長崎県国際協力推進員)

【主催】

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18(熊本市国際交流会館)

TEL: 096-359-2121 FAX: 096-359-5783

E-MAIL: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL <http://www.kumamoto-if.or.jp/>

(平成28年度文部科学省青少年教育施設を活用した国際交流事業として実施)